

路市,陸別町,本別町,帶広市など広い地域で,大型サイズは北見山地の下川町,大雪山系のヒサゴ沼,五色ヶ原,鹿追町の山中のはか,日高山系では七つ沼,清水町,新得町,十勝清水町,芽室町,帶広市,中札内村など日高山麓の東側一帯で確認された。また,標高3mから標高1,870mにいたるまでの広範囲に分布していた。これは繁殖水域が確保されれば,標高差に関係なくどこにでも生息・分布が可能であることを示している。

本種は止水性サンショウウオとされているが,繁殖水域の流速が5cm/秒以上の水域を「流水域」,5cm/秒未満を「静水域」,0cm/秒の水域を「止水域」と定義して解析すると,流水域での繁殖場所は全体の10%,静水域は44%,止水域は47%だった。これは,本種は完全な止水性を好むのではなく,少し流れのある水域でも繁殖することが示唆された。本種の卵嚢は無色透明の被膜でできているが,全体が乳白色の卵嚢が道北の上川郡下川町と中川郡中川町で確認された。この地域一帯に分布する本種の個体群に特徴的だと考える。

### 3. 旭川市近郊でみられる国内外来種アズマヒキガエルの分布状況と防除活動の取り組み

斎藤和範(旭川大学地域研)・青田貴之(旭川市)・八谷和彦(道拓殖短大)・中川裕樹(道拓殖短大)・ざりがに探偵団ビッキー(鷹栖町)  
2007~2012年にかけて,旭川市神居古潭から石狩川上流方向の旭川市街地,下流方向の深川市・妹背牛町・秩父別町・滝川市,砂川市,江別市まで,内大部川上流方向の芦別市まで,春~初冬にかけて広域分布調査を行った。またこれら範囲で4月末~5月において産卵池調査を行った。

防除活動は,旭川市富沢・台場東・神居地区の産卵池において(各地区1箇所ずつ),毎年5月から6月初めに,毎日日没後2~3時間程度たも網及び徒手によって成体及び卵塊を駆除,夏~秋には数日ずつ,日没後2時間程度,富沢地区の産卵池周辺及びカムイの杜公園において,亜成体・若齢個体を駆除した。

分布は,初めて斎藤らによって報告された1995年当時と比べ分布は拡大し,調査地全域および札幌市や石狩市で確認,産卵池もこれら地域で多数確認された。上流域への分布拡大は,人為的な成体・卵塊の運搬・放逐や自然分散が考えられるが拡大速度は遅い。下流域へは石狩川による流下が確認され,急速に分布が拡大。また,農業用幹線水路により,北空知頭首工から空知幹線・深川幹線,神竜頭首工から北幹線などで,滝川市・秩父別町・妹背牛町の水田地帯に分布が急速に拡大。

防除は旭川市富沢・台場東・神居・神居古潭で行っており,産卵期に産卵池周辺に行うのが効果的。分布拡大防止には,産卵池の消失,高密度域における社会教育や普及啓発看板などによる周知だけでなく,学校教育における外来種学習が緊急に必要である。

### 4. ニホントカゲの名前の変遷(北海道版)

徳田龍弘(ばいかだ WILD-PHOTO)

ニホントカゲとされてきたトカゲは,Okamoto & Hikida (2012)により,東日本産の個体群は新種ヒガシニホントカゲに分類された。それに伴い,北海道産のニホントカゲとされてきた集団もヒガシニホントカゲとなった。また,ここ10年間における「ニホントカゲ」の学名等が,同定の混乱などにより変遷していることも説明した。北海道のヒガシニホントカゲの名称の変遷は以下のとおり。

2000年頃ニホントカゲ(*Eumeces latiscutatus*)→  
2003年・ニホントカゲ(*Eumeces japonicus*)→  
2005年・ニホントカゲ(*Plestiodon japonicus*)→  
2012年・ヒガシニホントカゲ(*Plestiodon finitimus*)

※当発表は発表者の研究ではなく,発表者が最近のトピックスとしてこの件をまとめてレクチャーしたものである。

### 4. 北海道に侵入したトノサマガエルについて

高井孝太郎(北海道立総合研究機構)

トノサマガエルは本来,関東地方と仙台平野を除く本州,四国,九州,国外では韓国,中国,極東ロシアに分布しているが,近年,北海道への侵入が確認され

## 50 大会発表およびポスター発表要旨

ており,在来生態系への影響が懸念されている.しかし,外来生物を管理する上で重要な,侵入経路の把握,分布域とその推移,在来種への影響等についての情報整理,研究がなされていない.ミトコンドリアDNAによる系統解析の結果,侵入個体群は主に中部,近畿(兵庫県,滋賀県),中国地方(島根県,山口県)を起源とするものであることが示された.本種の分布は主に水田のような生息適地がある地域において拡大する傾向にあり,市街地や河川など移動の障害になるような環境がある地域では分布が拡大しにくい傾向にあった.加えてトノサマガエル密度と在来種であるニホンアマガエル密度には負の相関がみられた.食性調査の結果,本種は鱗翅目幼虫,クモ類,鞘翅目などの無脊椎動物を多く捕食していた.また,ニホンアマガエルの食性とは高い重複度を示した.トノサマガエル分布域にてピットフォールトラップにより地上徘徊性昆虫の量を調べたところ,トノサマガエルの捕食対象となっている分類群が減少していることが明らかとなった.以上の結果から,トノサマガエルは直接捕食により地上徘徊性昆虫に影響を及ぼし,ニホンアマガエルへは食物資源をめぐる競争によって影響を及ぼす可能性が示唆された.

### 5. 釧路湿原に生息するキタサンショウウオの調査手法

照井滋晴(NPO法人環境把握推進ネットワーク-PEG)

サンショウウオ類の個体群や生息環境の保護・保全を考える場合,どのような時期に,どのような場所で,どのような活動を行っているのかを詳しく把握する必要がある.しかし,一般的に繁殖期以外の時期にサンショウウオ類を観察することは困難であり,非繁殖期の研究データは少ないので現状である.そこで,非繁殖期の研究の事例として,これまでに釧路湿原で実施してきたキタサンショウウオの調査手法について紹介する.調査では,ピットフォールトラップを用い捕獲調査を実施した.また,捕獲した個体は,外部計測,胃内容物の採取,マーキングを実施し,再び

生息地に放逐した.胃内容物の採取は,胃にピペットで水を流し込むストマックポンプ法によって吐き出させる形で採取した.マーキングについては,(1)指切り法,(2)VIタグ,(3)PITタグの3つの手法を実施した.各手法にはそれぞれの利点や問題点が存在し,それを加味した結果,現在は指切り法とPITタグを併用する形でマーキングを実施している.これらの調査の実施によって,本種の非繁殖期の活動状況や活動場所の一端が明らかになってきており,本種の保護・保全に必要不可欠な基礎データが蓄積されてきている.他にも,多くの研究者によってマーキング用に採取した指の骨片を用いた年齢査定や捕獲個体に発信機を装着するテレメトリー調査,口腔内の細胞を用いたDNA調査等が実施されている.

### ポスター発表要旨

#### 1. 厚真町で発見されたエゾアカガエルの色素異常卵(予報)

浅野託矢・青山留美子・栗田洋一・小菅しおり・宍戸俊介・千代文也・森田衣久美・佐々木拓司・広瀬良宏・徳田龍弘(北海道エコ・動物自然専門学校)

2012年4月20日に厚真町で発見した胚が白いエゾアカガエルの卵塊を持ち帰り,成長を観察した.4月30日にはほぼ全ての卵が孵化し,孵化した幼生の体は全体的に白く,目だけ黒かった.なお成長するに連れて少しづつ体色は黒ずんだ.すべての幼生で平衡感覚の異常が見られ,水底で逆さになるなどの行動が見られた.また同時期に孵化した黒い幼生より成長が遅く,上陸には2週間から1ヶ月の上陸の遅れが見られた.十数匹は上陸が認められ,運動障害が認められた.体色は大変薄かった.上陸率が悪かったこと,飼育失宜により全個体が死亡したため,その後の観察や調査はできなかった.

なお,当予報は北海道爬虫両棲類研究報告Vol.1に一例報告として掲載されている.